

2010年も師走 10日余りを残すのみとなりました。

年中に けじめを付ける為、相手の要因でバタバタしておりましたが、己が“師”とする “人生の先輩の力”で後押しして戴き、やっとの思いで“新年を迎える形”が調いました。

「中国漁船が日本の巡視船に体当り 故意に衝突した事件」「日本政府のあまりにもお粗末な対応」、「海上保安庁が逮捕した中国漁船、この船長に“謝罪”“賠償”を 求める」当然の“事”であります。これが無く 自国は 存在出来るか？ 同等の事が 榛原医師会運営の中 委員会で起りました。大川雅龍編集委員長が船長の 一人乗り漁船が、私という巡視船に体当りしてきました。大川氏が一方的に 漁船仲間と結託し 身の潔白を主張する その為の上塗り で 私を攻撃しますが、既成の事実は一つ 変わりません。事実を曲げて伝える 為に 何度もあった“虚偽”“知ったかぶり”、この身近な“事”に 対応無き“編集委員”。

こんな状態の中での“心のひろば 最終号の巻頭言”、読みながら、過去に何度も在った事ですが、相手の“器”容量に 愕き 嘆き 愕然としました。

組織のトップの力量の無さから生じた状況を“マナーリズムを指摘されたことも事実であります”と 己の都合主義で“頓珍漢な把握”のまま 一言で片付けようと企て、私が勇気を絞って何度にも亘り指摘した提言、この本質を 噛み砕く事無く 闇に葬ろうとする。

己の内的要因で起った“事”を 訂正も出来ず 解決も成さず、ネガティブな情報 これを抹殺すべく企てた上で、不可能である事を 遅れて知ると、今度は 当時トップの責任と 事務方を引き込み 張本人“自称長老 三人組”が 責任転換を図る。来年の茶番劇であろうか？

歴代の榛原医師会長、“心のひろば 創設”の 加藤康二元会長、淡々と出来る事をこなされた小田原秀眞前会長はじめ、“贅”は無論 “非”の存在」これは 当然にせよ、己の評価を適切に成し 事を遂げてきた。これに対し 今の状況、医師会長 高木平氏「編集委員会の先生方とも熟慮を重ね話し合った上で...」と またも己の責任の多くの部分を連帯責任に回避する姿勢と示し、更に 編集委員長 大川雅龍氏に至っても、共に“己 自身に対する適切な評価”無く、己の都合で、軸足が定まらない状況で物申す事、控えるべきである。

“自然環境の変化による被害”とか、“人々のモラルの低下”“国の政策の貧困さ”等、外的要因であると並べ、どうか文面を纏めているが、“心のひろば 巻頭言”として、最低最悪の最終号と言えるのではないか。こんな状況で終わっていいのか？ 情け無い。

過去半年以上に亘り、トップのモラルの改善を求め、訂正を求め、力を尽くした。

何人かの“師”そして“友”の 私に対する提言により、今後は 名指しでの掲載は控える。今回は“40代最後の送付文”として、感じている事 これを 可能な限り 余す事無く伝える為、そして本人に気付いていただきたく、今年一年の決算として、敢えて 高木平氏 大川雅龍氏の名前を 挙げた上で、物申した。その様に させていただいた。

今年中に“事”を 解決・完結させた。委託する事は 己の信ずる処に授けた。次に 臨む。明るいニュース、「ナビスコを制した 次期王者“ジュピロ磐田”」「得点王“前田遼一”」色々と 起こる“事”、享受し、生かされ活きます。康寿診報 156号 送らせて頂きます。

平成 22年 12月 20日 加藤寿夫

ホームページが新しくなりました。<http://www.katoiin.jp> ぜひご覧ください。

《平成 22年 12月 康寿診報 第 156号 送付文》

裏面は“心のひろば”「第 386号 最終号 巻頭言」のコピーです。